

昭和①

昭和モダニズムを彩った 国産ガス機器



昭和11(1936)年頃の国産の蟹型ストーブ。
中央のスケルトンが赤くなり、ふく射熱で部屋を暖めた。

大都市が形成された昭和初期。東京は関東大震災から目覚ましい復興をとげ、大阪は大阪時代と呼ばれる黄金期を迎えます。街角にはモボやモガが闊歩し、サラリーマンという職業も生まれるなど、ゆとりを謳歌する人々も現れました。

ワンランク上の豊かさを求める声に呼応するように、住宅も進化をとげます。そのシンボルの存在が、東京や横浜に建てられた同潤会アパート。耐震性・耐火性を高めた鉄筋コンクリートづくりの集合住宅で、最先端の暮らしに欠かさない「三種の神器」と言える電気、水道、都市ガスを備えていたことも画期的でした。この時代、都市ガスは急速に身近なインフラになりました。たとえば



同潤会江戸川アパートの内風呂と、設置されていた同型の『はやわき釜』。

東京ガスの供給件数は昭和2(1927)年から昭和4年の間に、約33万件から60万件に倍増。関東大震災ではガス工場などの発火は一件もなく、導管の被害が少なかったことも普及を後押ししました。

輸入品が中心だったガス機器も、国産品が大勢を占めるようになりました。ユニークな製品として、ぜひ紹介したいのが写真の蟹型ストーブ。耐火粘土のスケルトンがガスの炎で甲羅のように赤くなることから、蟹型にするという着想を得たと言われています。インテリア

としても見栄えがする、ハイカラなデザインからは、少しでも魅力的な製品を提供したいと知恵を絞った開発者の意気込み



東京ガスの宣伝風景。街に出て新しいエネルギー、都市ガスをPR。



大阪ガスのチラシ。都市ガスで実現する暮らしをハイカラに表現。

が伝わってきます。

昭和6(1931)年に登場した『はやわき釜』は、湯沸器の原理を応用した風呂釜。それまでの薪炭のような手間がかからず、素早くお湯が沸く利便性によって昭和40年代まで販売されるロングセラーとなりました。また洋食が広がるにつれ、ガストーasterやパーコレーター(コーヒー沸器)も登場。ガス事業者が台所全体のリフォーム提案も行うなど、現在のシステムキッチンにつながる取り組みも始まっています。

リビングや浴室やキッチンで、モダンな暮らしを演出する都市ガスの黄金時代は、戦争の足音が大きくなる昭和10年代まで続くのでした。